

～イングウェイとハーモニックマイナー～

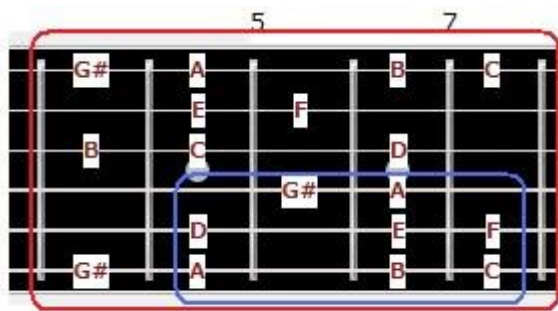
『イングウェイの奏法はハーモニックマイナー』と巷では言われていますが、
実際問題、イングウェイはハーモニックマイナーをどのようなロジックで使っているのでしょうか？

このレポートでは、それについて詳しく解説していきたいと思います。

まず、ハーモニックマイナーの奏法が解説される時、多くの場合は、
最初にハーモニックマイナーのスケールポジションが載っていたりしますね。

※例、A ハーモニックマイナースケール

(赤枠が5フレット近辺のポジション全体、青枠が1オクターブの範囲)



このようなスケールポジションを覚える事も重要なんですが、その前に、
前提知識として、楽曲のキーとスケール、さらにダイアトニックコードと各モードを
しっかりと把握しておかなければなりません。

イングウェイの曲は、『**ハーモニックマイナー**スケール』を使って演奏されているくらいなので、
当然、マイナーキーの曲が多いワケですね。
(メジャーキーの曲があるかどうかは、僕はちょっと知りません)

「マイナーキーの曲」ということは、そのキーセンターの音をトニックとした
ナチュラルマイナースケールをベースに、楽曲が構成されていることになります。

とあるイングウェイの曲があるとします。

わかりやすくする為に、その曲はキーセンターはA音で、マイナーのキー、
即ちAマイナーキーの曲だとしましょう。

Aマイナーキーの曲なので、その楽曲のベースとなるスケールは、

A ナチュラルマイナースケール(A エオリアンスケール)

になりますよね。

同じように、その楽曲を構成するダイアトニックコードは、
A ナチュラルマイナースケールから導き出される、

I m7	=Am	(Am7)
II m7 ♭ 5	=Bm ♭ 5	(Bm7 ♭ 5)
♭ III M7	=C	(CM7)
IV m7	=Dm	(Dm7)
V m7	=Em	(Em7)
♭ VI M7	=F	(FM7)
♭ VII 7	=G	(G7)

となります。

で、A ナチュラルマイナースケール(エオリアンスケール)の1音1音に対応する、
チャーチモードのスケールとして、エオリアン～ミクソリディアンまでのスケールがある、と。

I m7	=Am	(Am7)	エオリアン
II m7 ♭ 5	=Bm ♭ 5	(Bm7 ♭ 5)	ロクリアン
♭ III M7	=C	(CM7)	アイオニアン
IV m7	=Dm	(Dm7)	ドリアン
V m7	=Em	(Em7)	フリジアン
♭ VI M7	=F	(FM7)	リディアン
♭ VII 7	=G	(G7)	ミクソリディアン

マイナーキーの楽曲は、基本的に、このようなコードとスケールをベースに構成されています。

ですがイングウェイは、

マイナーキーの曲＝楽曲の構成としては、ナチュラルマイナースケールをベースに
作られているはずの曲の中で、ハーモニックマイナースケールを使っているらしい、と。

当然ですが、ナチュラルマイナースケールとハーモニックマイナースケールは、

共通点はあれどそれぞれ違うものです。

しかし、イングウェイは、ナチュラルマイナースケールベースの曲の中で、
ハーモニックマイナーを使っている。

この矛盾を解決するには、

ハーモニックマイナースケールのダイアトニックコードとモード

を理解する必要があります。

ナチュラルマイナーをベースにしたダイアトニックコードとモードがあるように、
(正しくはナチュラルマイナー(エオリアン)「ガ」チャーチモードの一部ですが)

ハーモニックマイナーにも、それをベースにしたダイアトニックコードと各モードがあるのです。

で、そのハーモニックマイナースケールから導き出される、
ダイアトニックコードと各モードがこちら。

- I mM7 ハーモニックマイナー
- II m7 b 5 ロクリアン 13(or ロクリアン 6)
- b III augM7 イオニアン#5
- IV m7 ドリアン#4
- V 7 ハーモニックマイナー P5th ビロウ(or フリジアンドミナント)
- b VI M7 リディアン#9(or リディアン#2)
- VII dim7 オルタード b b 7((or スーパーロクリアン b b 7)

スケール構成を複数の解釈が出来るスケール(モード)は、呼び方が書籍や人によって
違ったりしますが意味している事は同じです。(カッコ内の呼び方もあるということ)

ここまでの解説での重要なポイントは、

ナチュラルマイナーからも、ハーモニックマイナーからも、ダイアトニックコードが導き出せる

というところです。

両スケールのダイアトニックコードを見比べてみましょう。

※ナチュラルマイナー

I m7	エオリアン
II m7 b 5	ロクリアン
b III M7	アイオニアン
IV m7	ドリアン
V m7	フリジアン
b VI M7	リディアン
b VII 7	ミクソリディアン

※ハーモニックマイナー

I mM7	ハーモニックマイナー
II m7 b 5	ロクリアン 13(or ロクリアン 6)
b III augM7	イオニアン#5
IV m7	ドリアン#4
V 7	ハーモニックマイナー P5th ビロウ(or フリジアンドミナント)
b VI M7	リディアン#9(or リディアン#2)
VII dim7	オルタード b b 7(or スーパーロクリアン b b 7)

ちょっと見比べにくいと思いますが笑、コードとして近しいものが結構ありますよね？

もっとわかりやすくするために、次は、7th まで含めた 4 和音ではなく、3 和音にして両者のダイアトニックコードを見てみましょう。

※ナチュラルマイナー

I m
II m b 5
b III
IV m
V m
b VI
b VII

※ハーモニックマイナー

I m
II m b 5
b III aug
IV m
V
b VI
VII dim

両者のダイアトニックコードをトライアド(3和音)まで単純化してみると、いくつかまったく同じ表記のコードが出てきます(I m、II m b 5、IV m、b VI)

ここからもわかるように、要するに、

ナチュラルマイナーとハーモニックマイナーは、かなり近い存在である、と。
(実際、どちらもマイナー系のスケールですし、構成音も1音しか変わらないので当然ですが)

では、ここまでの話を踏まえた上で、イングウェイのやっていることを分析してみましょう。

わかりやすいので、今までの例と同じように、
Aマイナーキーの曲をイングウェイが作曲して弾いているとします。

Aマイナーキーに対応するスケールはAナチュラルマイナーですが、
その曲の中でイングウェイは、Aハーモニックマイナーでソロを弾くでしょう。

その時、その曲のコード進行はどうなっているのかというと、トライアドまで単純化した、ナチュラルマイナーとハーモニックマイナーの両ダイアトニックコードの内から、共通しているコードをベースに、楽曲のコード進行が作られている筈です。

要するに 先ほど両スケール共通のダイアトニックコードとして挙げた、主に『I m、II m b 5、IV m、b VI』の4つのコードを使って曲が作られている(可能性が高い)、と。

もちろん、それ以外の両スケールのダイアトニックコードも使われますし、曲によっては、もっと別のアレンジ手法をとっているかもしれません。

基本的な事として、

ナチュラルマイナーのダイアトニックコードが作られている曲(部分)は、ナチュラルマイナーでプレイしますし、

ハーモニックマイナーのダイアトニックコードで作られている曲(部分)は、ハーモニックマイナーでプレイします。

しかし、両スケール共通のダイアトニックコードで作られているならば、その曲(部分)は、どちらのスケールで弾いても良いことになりますよね。

イングウェイのプレイはハーモニックマイナーを使っている割合が多いですが、フレーズを採譜してみると、ちゃんとコードに合わせて使う音を選んでいることがわかります。

ハーモニックマイナーで弾きまくっている所は、多くの場合、コード進行がハーモニックマイナーだけで弾き続けられるような進行になっています。

(※イングウェイの曲を全て知っているわけではないので、例外もあるかもしれませんが)

通常マイナーキーの曲は、ナチュラルマイナー(エオリアン)のモードをベースに作られ、ハーモニックマイナー(やメロディックマイナー)などのモードはアクセント的に使われます。(コードアレンジ、フレーズアレンジ的に)

ですがイングウェイの曲の多くは、コード進行として、楽曲の多くの範囲でナチュラル、ハーモニック両スケールのどちらでも弾けるような構成なのでしょう。

イングウェイがどこまで理論的なことを知っているかはわからないのですが、おそらく最低でも、基礎的な楽典は全て知っているのではないかと思います。(でないとなのような曲(コード進行)を作れないはず)

ということで、イングウェイがなぜハーモニックマイナースケールを使えるのか？を纏めると、

ナチュラル、ハーモニック、両マイナースケールのダイアトニックコードをベースに、ハーモニックマイナースケールでも演奏できるように楽曲を作っているから、

と、言うことですね。

ナチュラルマイナーのダイアトニックコード(=マイナーキーのダイアトニックコード)には、普段から触れているので馴染みがあると思いますが、**イングウェイのやっていることを分析する場合、ハーモニックマイナーのダイアトニックコードを知っている必要があります。**

その辺りを意識して、楽曲(コード進行)の分析とフレーズのコピーをしてみると、
イングウェイの奏法が理解できるでしょう。

では、このレポートは以上になります。

ありがとうございました。

発行者: 大沼俊一

メインサイト: <http://shunonuma.com/>